

地域共生社会づくりに積極的に取り組む市町村等との意見交換会 開催概要

○ 開催日時

令和5年1月25日(水) 10:00~11:45

○ 開催場所

WEB開催(配信会場:TKP 札幌ビジネスセンター赤れんが前 5H会議室)

○ 出席者

《市町村・民間機関》

- ・北海道江別市企画政策部・健康福祉部
- ・つしま医療福祉グループ(就労継続支援事業所)【北海道江別市】
- ・社会福祉法人佛子園(ぶっしえん)【石川県輪島市】
- ・一般社団法人北海道総合研究調査会(HIT)【北海道札幌市】

《北海道》

- ・北海道保健福祉部障がい者保健福祉課
- ・北海道保健福祉部高齢者保健福祉課
- ・北海道保健福祉部子ども子育て支援課
- ・北海道保健福祉部地域福祉課
- ・北海道教育庁特別支援教育課
- ・北海道石狩振興局社会福祉課

《国》

- ・北海道厚生局【オブザーバー】

○ 開催内容

1 地域共生型社会づくりの取組報告について

(1) 江別市

平成30年度から、江別市の大麻地区にある札幌盲学校跡地の一部を利用して、官民協働で進める「江別市生涯活躍のまち整備事業「ココルクえべつ」」の取組などについて説明

(2) つしま医療福祉グループ(就労継続支援A型事業所なかま)

「江別市生涯活躍のまち整備事業「ココルクえべつ」」の就労継続支援A型事業所の取組などについて運営主体として説明

(3) 社会福祉法人佛子園

石川県輪島市で「温泉」「蕎麦屋」「フィットネス」などの障がい者の方々が就労している施設、高齢者デイサービスやサービス付き高齢者向け住宅などの高齢者施設など地域の様々な方の関わり合いの拠点となる居場所の組み合わせ(ごちゃまぜ)を輪島市中心部の空き屋や空き地を利活用し、子どもから高齢者、障がいや疾病の有無・国籍等に関わらず地域に暮らすすべての人たちの共生拠点を展開する「輪島市生涯活躍のまち「輪島KABULETプロジェクト」」について、運営主体として説明。

2 主な意見交換の内容

「現行の社会資源を活かし、高齢者も障がい者等も利用できるサービスの推進など、地域共生に資する取組を展開していくために」をテーマに以下のとおり意見交換。

■ 北海道保健福祉部地域福祉課

・江別市の取組は、市と法人が共同して色々なプロジェクトを進めているが、佛子園さんと地域の自治体との関係性について教えてほしい。

→ (社会福祉法人佛子園)

運営自体は独立してやっている。

輪島市の協力をいただきながら、都市計画課、企画課、福祉課など関係各所と密に連携を図り、取組を進めている。

■ 北海道保健福祉部障がい者保健福祉課

・江別市、輪島 KABULET の取組について、いかに多くの人を巻き込んで人の集まる場所を作り、活躍する場を作ることが大事。

障がいの担当部局として、障がい者の方が活躍できる場を作っていくことにこれからも取り組んでいかなければならない。

■ 北海道保健福祉部地域福祉課

・江別市に教えてほしいが、交流サロンをやる際に、住民など、仕掛けのコアとなる方がいるのか。本のサロンなど、どのように事業のアプローチをしているのか。

→ (江別市)

整備事業ということで、交付金を活用しながら実施。

施設の整備をする前からコーディネーターを常時2名と外部コーディネーターの随時3名の計5名の方に取組みを進めていただいている。

本サロンは、NPO法人がコーディネーターとつながりがあって協力してもらっている。

コーディネーターは市の職員ではなく、つしま医療福祉グループの職員。

市民に、ご理解をいただくことが重要で、主に市報でアプローチを周知、担当課から、こま目に自治会にアプローチ。

地域の取組みは、市が全面的にサポート。このご時世なので、市からのサポートで地域住民に安心して活動に参加していただけることが重要。

・佛子園に教えてほしいが、事業開始する際、輪島市からアプローチがあったのか。

→ (社会福祉法人佛子園)

まずは輪島市が危機感を覚えることからスタート。地方消滅など、ますだりポートが話題になっていた時期。

当時の市からアプローチがあった。

われわれ法人としては、一緒に同じ方向を向いてくれる、本気で一緒に取り組んでくれる自治体でなければ、その場所では実施しない。法人からは、アプローチはしない。

■ 道保健福祉部高齢者保健福祉課

- ・江別市への質問になるが、道内の他自治体で実施する場合、ポイントや課題等について教えてほしい。

→ (江別市)

社会福祉法人佛子園が言われたことが全てと考えているが、地元の住民に説明して合意を得ながら進めていくこと、それと自治体の覚悟が一番大事になってくる。

事業者と自治体、双方の決意や覚悟が必要。

■ 北海道保健福祉部子ども子育て支援課

- ・「ココルクえべつ」では、子育て交流サロンや子どもの遊び場といった広場を開設されている。最近では未就園児対策が重要になってきていて、保育所や幼稚園のどこにも通わない児童・親のフォローをどうするか対策が、今後、国も道も市町村も重要になってきている。これからは、今までの子ども中心の支援から家庭も含めた支援に取り組むことがトレンドになってくる。「ココルクえべつ」では、既にそういった取組みが進んでいるということで、非常に素晴らしい取組み。

■ 北海道教育庁特別支援教育課

- ・江別市とつしま医療福祉グループには、これまでも特別な支援を要する子に対して協力をいただいて、現場実習などをさせていただいている。

特別な支援を要する生徒や保護者は、学校生活もそうだが、それ以上に子どもの自立と社会参加に期待以上に不安を抱いている保護者が多い。そういった中で、「ココルクえべつ」においては、先輩たちが働いている様子を見ることができるので、生徒、保護者にとっては、ロールモデルをみることができると、スターを見ているように感じていると思う。私どもも、今後とも、道内の特別支援学校に、このような取組みを周知していきたいと考えている。

- ・佛子園の先ほどのお話を聞いて、私たちが、学校の中で障がいのある子もない子も可能な限り同じ場でというインクルーシブ教育システムを進めているが、お話を聞いて、やはり学びの場は学校に限らないなと感じた。

取組としてはかなり広がっているが、実際の雇用創出といった観点では、どのような効果があがっているのか差し支えない範囲で教えてほしい。

→ (社会福祉法人佛子園)

最初、2015年12月に職員12人でスタート。

現在は雇用契約数100人以上。

A型事業所の利用者41名を加えると、130名程度。

■ 北海道石狩振興局社会福祉課

- ・「ココルクえべつ」について、コロナ禍でも工夫して取組を実施されてきており、住民からの認知度も上がってきていると感じている。

今後の取組にも注視し、地域政策課など横連携しながら、下支えをさせていただけたらと考えている。

■ 北海道厚生局【オブザーバー】

・地域共生や地域包括ケアなどの仕事を厚生局では実施しているが、その中で生涯の活躍のまち作りというのがあるが、色々なところに話を聞いている中で、行政が最初、音頭を取って、色々な事業者を巻き込み、事業者にメリットがあれば、事業者主体となって、進めていき、そのうち行政が手を離していく、といった進み方が見受けられるが、そういう意味でいうと、コルクえべつやカブーレさんは、究極の姿ではないかと思う。

・説明を聞いて安定して運営していると感じたが、今現在、地元の住民から、もっとこういうことをやりたい、こういうことに携わりたいという要望があるかお聞きしたい。

→ (江別市)

特に、住民からのリクエストがあるということは承知していないが、開設当初から言われていることは、来場者数が増えてきたということはお知らせしたが、始まって間もないということもあるが、それでも知らない人がいて、どんなに広報や SNS、チラシの配下、ホームページで掲出しても知らない方はまだまだいる。興味がない方は情報を取りに行かないので、そういった方々にも届くように周知を広げていきたい。大学の授業の中で、こういった取組を試みたいなど、お声がけをいただく機会があったり、コルクえべつで、こういったことが出来ないかといったことを事業所さんからお声をいただくことはある。

→ (社会福祉法人佛子園)

具体的には、事業承継ということが、よくリクエストとしてあがってくる。

輪島市は水産業の街でもあり、水産業も水産加工場の担い手がいないので、水福連携できないかという声がある。

■ 北海道厚生局【オブザーバー】

・今、取り組んでいて、制度として、やりづらい点や、もっとこういった制度があったら我々は、もっと動けるんだというものなどがあったら教えてほしい。

→ (社会福祉法人佛子園)

輪島の課題として、配食サービス、グループホームなどを実施する中で見えてくるものとして、中山間地域として、独居の方が多くて、生活弱者、買い物弱者など住まいに課題を抱えている方が非常に多くいることから、第3の場所として、我々は人が集まる仕組みを作っている中で、次は住まい支援、そういう住まいの支援と第3の場所というものを連動させていくことで、ノーマルリードビハインド、誰もおいていかないですむような環境を、その地域で作っていくことができるのか、その住まいに関して、どう考えていくのが課題。住まいの確保だったり、住まいだけでなく住まいに困難を抱えている人が働ける場所だったりを作っていくと都市部以外は厳しいと考えている。

また、福祉サービス事業所の人員配置基準にすごく苦しんでいる。有資格者がなかなか見つからないので、有資格者の配置にすごく苦労している。人材確保が難しい。その当たりの要件緩和が要望としてある。

→ (つしま医療福祉グループ)

障がいの方が何ができるのか、何ができないのかを地域住民の方に理解いただくことが大事だが、今は、若いときに障がい者の方と接する機会がないまま、大人になってしまった方は、何ができるのか、何かできないのか、わからないので、どちらかという、できないだろうと思っている方が多いことが現状で、これを解決するには、もう少し、若い時に障がい者の方と接する機会があれば良いと考える。

・ココルクえべつ内には、特別に共生型ということで、同一法人内で就労継続支援事業所 A 型と障がい者グループホームの運営を認めてもらっているが、実際に働く方の立場になると、通勤がすごく短いということは非常に有益なので、たしかに同一敷地内での運営は色々危惧することもあると思うが、ぜひ、有益な点も考えて、指定基準の緩和も検討していただけたらと考える。

■ 北海道厚生局【オブザーバー】

・社会福祉法人佛子園の話にあった自治体の覚悟について、具体的に言うと、例えば自治体の存続する危機感なのか、あるいは、まちづくりをとにかくやりたいんだ、自治体が最後までフォローするんだという覚悟なのか、その辺をお聞きしたい。

→ (社会福祉法人佛子園)

我々は伴走型だと思っていて、結局は自治体の主体性だと思っている。

そこで最後まで一緒に、という覚悟だと思っている。それも首長を含めて。